

生涯学習の視点に基づく日本語学習ポートフォリオ作成活動¹

—グローバル化社会における日本語学習環境の構築—

山内薫（早稲田大学）

Portfolio Activities for Japanese Language Learning based on the
Perspective of Lifelong Learning:
Designing a Learning Environment for Japanese in a Globalized Society

Kaori YAMAUCHI (Waseda University)

キーワード： 日本語学習ポートフォリオ, 生涯学習／教育, グローバル化社会, 自己評価の可視化と蓄積, 「時間的統合」と「空間的統合」

Keywords: Japanese language learning portfolio, lifelong learning / education, globalized society, visualization and accumulation of self-evaluation, “temporal integration” and “spatial integration”

SUMMARY

In this paper, we present the results of an action research project focusing on portfolio-making activities for Japanese language learning. We conducted and analyzed activities at universities both in Japan and abroad. Thus, we found that such activities enable the visualization and accumulation of the learners' process of learning, and can also be a model for designing a learning environment from the perspective of lifelong learning.

1. 研究の背景

第二次世界大戦末にグローバル化ということばが出来てから、90年代以降、急速にグローバル化が進み、地域や国の境界を越え、地球規模で人や文化が瞬時に結びつく手段が増えた。近年のグローバル化志向は、大学教育においても浸透しており、グローバル化への体制整備やグローバル人材の育成が推進されている（日本学術振興会 2014、文部科学省 2014a）。文部科学省は、大学教育における「世界に雄飛する人材の育成」を急務とし、2014年度「グローバル人材育成推進事業」事業を開始した。この事業は、「徹底した『大学改革』と『国際化』を断行し、我が国の高等教育の国際通用性、ひいては国際競争力強化の実現を図り、優れた能力を持つ人材を育成する環境基盤を整備する」ことを目的とする（文部科学省 2014b）。日本語教育学の分野においても、大学教育における留学生数の拡大や「領域横断的な知識を修得するカリキュラム

改革」が進み、グローバル化社会における日本語教育に対する関心が高まっている（嘉数 2011、萬・村上編 2009、立教大学日本語教育センター2016 他）。

今後も発展し続けるグローバル化社会を生きていくためには、一人ひとりが、人生における様々な経験からつくられた個々に内在する多様な能力を統合したうえで、自身の生涯において発揮できることが必要となる。しかし、現行の日本語教育において、学習者が自身の価値に関して自己評価できるような学習環境は、まだ十分には構築されていない。このような状況に鑑みると、学習者が「自己評価の可視化と蓄積」—日本語／外国語学習と様々な学習経験を併せ、「生涯」という観点から内省し、統合的に意味づけ、各人が保有する多様な能力（言語的能力、専門的能力、生きる力）の活用へとつなげられるような学習環境の構築は、日本語教育における喫緊の課題であろう。そこで筆者は、学習者が自らの日本語学習を「生涯」という観点から内省できるようになることを念頭に、日本国内及び海外の大学教育機関で生涯学習／教育の視点を導入した日本語学習ポートフォリオ（以下、ポートフォリオ）作成活動を実施した。

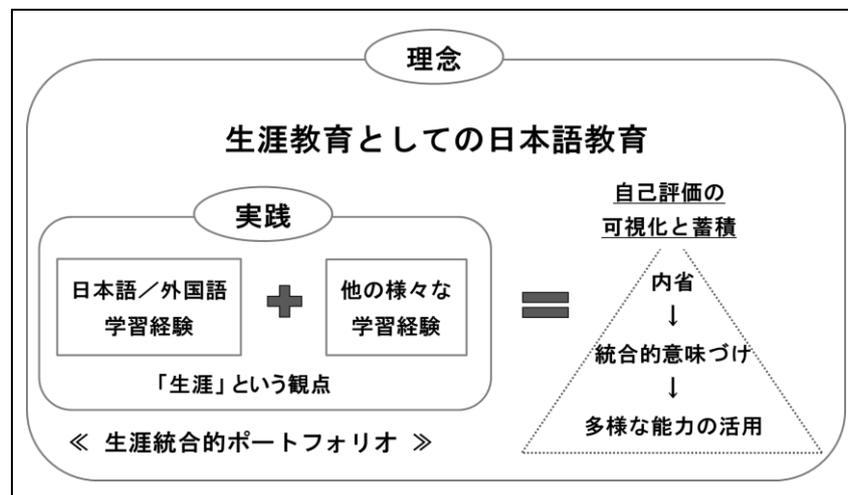


図1 外国語学習者のための「生涯教育としての日本語教育」実践モデル

本研究では、発表者が国内外で行った3回のポートフォリオ作成活動を提示する。そして、活動の成果をもとに生涯学習／教育の視点に基づく日本語学習環境をどのように構築すべきかを考察する。

2. 先行研究

2.1 生涯学習／教育という観点

生涯教育という概念は、1965年12月に、ユネスコ主催の成人教育会議においてフランスの教育学者であるポール・ラングラン（Lengrand, Paul）により正式に提唱された。ラングランは、「生涯教育の理念は、①個人の生まれてから死ぬまでの生涯にわたる教育（水平的次元）と②個人及び社会全体の教育（垂直的次元）の統合にある」（持田・森・諸岡 1979, p.3）とした上で、あらゆる教育機会の統合に鑑み、生涯教育を「生涯にわたり統合された教育（Lifelong integrated education）」とした。

1965年12月の同会議において、第3回成人教育委員会は、ユネスコ本部に対して、次のような教育過程の課題を提起している。

ユネスコは誕生から死にいたるまでの人間の一生を通じて行われる教育の過程—それゆえに全体として統合的であることが必要な教育過程—をつくりあげ活動させる原理として生涯教育という構想を承認すべきである。そのため人の一生という時系列に沿った水平次元と個人及び社会の生活全体にわたる垂直次元双方にわたって必要な統合を達成すべきである。(持田・森・諸岡 1979、p.24)

以上のような生涯教育の観点にもとづけば、教育の実践においては、「生涯に渡り継続される時間的統合」と「学校・地域社会・家庭の空間的統合」という二つの視点、及びそれらの視点の統合が目的とされる必要がある。

2.2 ポートフォリオ

前節で述べたような教育実践の目的は、プログラムやカリキュラム、教授内容、学習環境など、様々な側面に反映されうる。筆者は、学習者自身が、自らの「生涯」という観点から言語学習経験や様々な学習経験を内省により連繋させることにより、「生涯に渡り継続される時間的統合」(以下、「時間的統合」)と「学校・地域社会・家庭の空間的統合」(以下、「空間的統合」)を行えるような学習環境の構築を目指す。

学習者は、時間の流れの中で自身に関わる様々な事象を連繋させながら変容する存在である。学習者自身が、自らの多様な経験を統合的に自身の内に意味づけることにより、グローバル化社会を生きていくために必要となりうる、各人が保有する多様な能力(言語的能力、専門的能力、生きる力)の活用へとつなげられるようになる。そのためには、学習者が各自で自己評価を可視化するとともに、蓄積することが肝要である。そこで、筆者は、自己評価の可視化と蓄積の方法として、「ポートフォリオ」に着目した。

言語教育の分野では、欧州評議会による『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)』(吉島・大橋訳・編、2004)における「ヨーロッパ言語ポートフォリオ(ELP)」の提案が、ポートフォリオの本格的な導入を促した(独立行政法人国際交流基金編 2009)。ELPは「学習者個人が学習記録を自ら記述保管しておくことにより、学習への動機づけ、学習効果を高めようという考え」に基づき、提案された(山川 2008、p.100)。Molinié & Pungier (2008)は、ポートフォリオに関し、次のように説明している。

ポートフォリオは、決して、それぞれに関連が無い多数の資料が置かれるようなファイルではないし、無論、軌跡や省察のない作品の寄せ集めでもない。学習者の成果の整理保存の場以上の、省察とフォローアップ、そして評価の場である。ポートフォリオは単なる成績表からは程遠いもので、学習者に、彼らの学習における前進を評価し続けうるダイナミックな手段である。(p.5; 筆者訳)

また、モリニエ（2008）は、ポートフォリオの有効性について、「①意味をもたらす学習を行なうこと、②学習者としての自分を熟知すること、③自分自身の学習の歩みに責任を負うこと」（p.22）とまとめている。そして、ポートフォリオは、『『最新』の教育パラダイムの普及を具現化するものである：学習のツール』であり、その意義として、「①知識を共に構築すること、②教師、学生、及び制度が一貫して協働すること」を挙げている。（p.24）

日本語教育においても、文化庁の「生活者としての外国人」に対する「日本語学習ポートフォリオ」（文化庁 2014）を始め、独立行政法人国際交流基金が開発した『JF 日本語教育スタンダード』において、「相互理解のための日本語」に必要なポイントの一つとして「ポートフォリオ」が示されるなど、様々な教育機関で試用段階にある。独立行政法人国際交流基金編（2010）では、ポートフォリオを、相互理解のために必要となる「課題遂行能力」と「異文化理解能力」の育成のために、「学習者一人一人が学習過程を記録し、保存するもの」であり、「学習過程を記録し、ふり返ることで学習成果の評価のツールとして使うこと」ができると定義している（p.22）。

3. 生涯学習／教育の視点に基づく日本語学習ポートフォリオ作成活動

3.1 「生涯」という観点からの内省を促すポートフォリオの枠組み

筆者は、日本国内及び海外の大学教育機関において、新たなポートフォリオの構築、及びこれまで継続的に実施されてきたポートフォリオの改良を行った上で、以下の二点を枠組みとするポートフォリオ作成活動を行った。

- ・学習者に内省を促す問いは、「時間的統合」と「空間的統合」という二つの視点、そしてそれら二つの視点の統合ができるように設定する。
- ・学習者を「時間の流れの中で自身に関わる様々な事象を連繋させながら変容する存在」として捉える。

3.2 日本語学習ポートフォリオ作成活動の事例²

日本語学習ポートフォリオ作成活動は、海外の学部生及び国内の留学生を対象とし、異なる方法により 3 回実施された。具体的な対象、実施方法や期間等は、以下の表 1 のとおりである。

表 1 日本語学習ポートフォリオ作成活動

対象	実施方法	使用言語	実施期間	単独／共同
①海外の学部生（フランス国立大学の日本語学習者 約 200 名）	日本語科目「言語実践」内の一活動	日本語	2010-2011	筆者単独
	「個人カード」 ³	仏語	2013-2014	竹内理恵氏と共同

②国内の留学生（都内大学日本語教育研究センター留学生 約15名）	テーマ科目「ポートフォリオを使って日本語学習を考える 3-6」 ⁴	日本語	2014年度 春学期	黒田史彦氏 と共同
----------------------------------	--	-----	---------------	--------------

①海外の学部生を対象とするポートフォリオ作成活動⁵

まず、2010-2011年度の日本語科目「言語実践」内の一活動において、年度内に3回、各学習者は自宅でポートフォリオに、日本語学習や大学の学生生活・授業などのふり返りを記述した。また、クラス活動の一環として、ポートフォリオへの書き込み内容を軸に、その一部を再構成し、「私の日本語上達法」をテーマとする口頭発表、日本語の教科書作成あるいは日本語授業デザインを、個人あるいはグループにより行った。授業担当者の役割は、ポートフォリオの保管、フィードバック（面談）、学習者間の共有の場を構築することである。「生涯」という観点からの内省を促すポートフォリオの枠組みとしては、日本語学習を継続しにくい学習環境に鑑み、過去－現在－将来をつなぐ問いの設定、及び各人が保有する多様な能力（言語的能力、専門的能力、生きる力）を記述できる仕掛けを設定した。具体的には、次の1) 2) のふり返りを記述した上で、記述内容に基づき、学習者が大学という学習環境と時期の意義を問い直す機会を継続的に設けた。1) 日本語学習（得意・不得意、自身の日本語上達法、短期的目標・長期的目標、学習計画・達成度）、2) 授業・試験の感想や反省、印象に残っていることなど（山内 2013）。

次に、2013-2014年度の「個人カード」においては、複言語複文化環境、日本語学習環境、専門科目の学習環境、職業とキャリア・人生などを新学期開始時に記入した。授業担当者の役割は、ポートフォリオを保管するとともに、記入した内容を軸に、各学習者に日本語学習に対する意識化を促すことである。「生涯」という観点からの内省を促すポートフォリオの枠組みとしては、上述した1) 及び次の3) 4) に関し、「個人カード」に記述した上で、「個人カード」に記述した内容に基づき、学習者が自身にとっての学習の意義を問い直す機会を継続的に設けた。3) 複数の母語（本人の母語・母親の母語・父親の母語・家庭内の言語）、他言語学習歴、専門分野・領域、週間授業スケジュール、4) 日本語授業以外のふり返り（日本科の専門科目、日本科以外の選択科目、ダブル課程あるいはダブルスクールの専門科目）。本ポートフォリオは、各学習者が自宅で作成した。ポートフォリオに記述された内容を他の学習者と共有する機会は設けなかった。

<p>①日本語科目「言語実践」</p> <p>pratique de la langue (2010-2011) 名前 _____</p> <p>◆ ふりかえり 2 ◆</p> <p>◎今の「学習時間」: 休みの日と大学の授業がある日、一日何時間くらい勉強していますか。↵ 休みの日→ _____ 大学の授業がある日→ _____</p> <p>◎今の「学習の方法」: 日本語の上達のために、大学や家で、どのような勉強をしていますか。↵ _____ _____</p> <p>◎今の「得意・不得意」: 日本語の学習と日本語で、得意な点、不得意な点を書いてください。↵ 得意な点→ _____ 不得意な点→ _____</p> <p>◆ 目標と学習計画 ◆</p>	<p>「個人カード」</p> <p>Licence 1 / Japonais Initiation à la langue et à la linguistique japonaises</p> <p>Université Lille 3 2012-2013</p> <p>Nom _____ Prénom _____</p> <p>Langues</p> <p>-Langue maternelle -Langue maternelle de la mère -Langue maternelle du père -Langue parlée à la maison</p> <p>_____</p> <p>-Langue(s) apprise(s) Langue 1 : _____ Apprentissage : _____</p> <p>photo</p>
--	---

図2 海外の学部生を対象とするポートフォリオ

②国内の留学生を対象とするポートフォリオ作成活動

各学習者は、自宅でポートフォリオ冊子内の学習目標、計画、記録、振り返りなどを記入した上で、毎週、教室に持参した。クラス活動の一環として、ポートフォリオへの書き込み内容を軸に、学習計画、学習方法、学習リソース、教室外での学び、学習とやる気の関係、人生プラン、時間の使い方などをテーマに意見交換を行った。授業担当者の役割は、受講者に質問を投げ掛けて思考を深化させたり、活発な意見交換を促したりすることである(黒田・山内 2016)。

「生涯」という観点からの内省を促すポートフォリオの枠組みとしては、人生における留学生活の位置づけの図示、及び約1年の日本滞在による日常生活全般から教室内外での日本語使用体験を記述できる仕掛けを設定した。具体的には、「現時点での人生プラン」として、日本語との出会いから留学後、さらに将来に関わる最終目標までの期間における自身にとって特筆すべき日本語との関わりを中心に、①の1)日本語学習のふり返りの一部を図示した。また、教室内外での学習リソースのふり返りにおいては、リソースの具体例をグループのメンバーに提示した後、日常で活用されているリソースを列挙し、それらのリソースのつながりを図示した。

また、カレンダーの形式を用いたポートフォリオ(月と週の目標・ふり返りを書き込む学習カレンダー)には、日本語学習に関連の無さそうな活動も含む大学内外の出来事(日本の生活における自身の習慣、自身の変化に対する気づきなど)を自由に記述する欄を設けた。

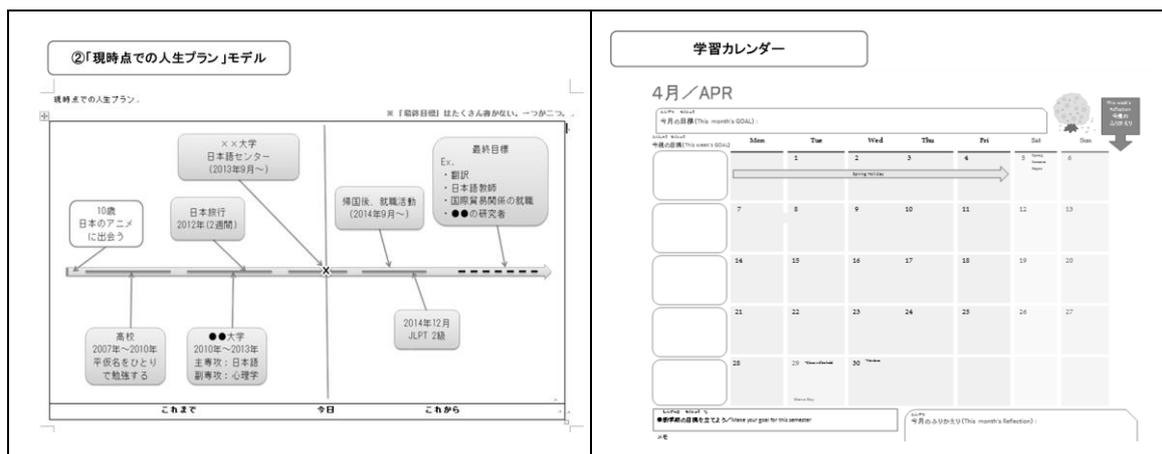


図3 国内の留学生を対象とするポートフォリオ

3.3 分析方法と対象

本研究では、3.2で紹介した①②で作成されたポートフォリオから、記述内容の豊かなポートフォリオを3編ずつ選んだ上で、ポートフォリオの記述、及び図をSCAT(大谷 2011)を援用し、次の二つの観点で質的に分析した。(1)ポートフォリオ作成活動は、各学習者の「自己評価の可視化と蓄積」の機会となっていたか、(2)「自己評価の可視化と蓄積」により、学習者の日本語学習や学びに対する意識はどのように変容する可能性があるか。

4 結果

分析の結果、ポートフォリオ作成活動は、各学習者の「自己評価の可視化と蓄積」の機会となり、授業内外において無意識的に行っていた様々な活動や行為を意識的な学習へと変容させるきっかけとなっていることがわかった。以下、3.2の①②のポートフォリオ作成活動が、学習者の日本語学習や学びに対する意識にどのように作用していたかを記述する。

4.1 海外の学部生を対象とするポートフォリオ作成活動

4.1.2 「言語実践」内の一活動

- ・ポートフォリオ作成活動は、日本語学習者が、日本語学習と自身の人生のつながりを省察する機会の一つとなっていた。学習者は、ポートフォリオ作成活動をとおし、将来像と日本語の関連づけを行った上で、将来像と日本語の関連づけに即し、目標を設定し、学習を進めることにより、人生における日本語の位置づけを行っていた。
- ・人生における日本語の位置づけは、学習者によって多様であり、明確な者、行っていない者、曖昧な者、揺らいでいる段階の者、喪失した者など、様々な段階に分かれる。位置づけは動的であり、一人の中でも、時期により変容していた。

4.1.3 個人カード

- ・学習者自身が自身の保有する複数の言語(家庭言語、中高から学習した外国語など)

がどのように形成されてきたか認識した上で、将来像と自身の保有する複数の言語との関連性を意識化する機会となっていた。さらに、過去－現在－将来に関わってきた／関わっている／関わりたい他の専門分野と日本語学習をつなげられることも意識化された。そのようにして意識化された内容は、自身が実現したい具体的な言語能力として、「個人カード」の記述に反映されていた。

4.2 国内の留学生を対象とするポートフォリオ作成活動

4.2.1 図示

- ・現在の自分自身を基点として、過去－現在－将来のつながりを作成することにより将来の職業や居住・移動の可能性に関し、具体的に構想していた。
- ・日常において活用されている学習リソースには、日本語学習のために意識的に選択しているリソース以外にも無意識的に活用している効果的なリソースもあるということに認識するようになった。それにより、自身の周囲にある様々な事物が学習の一部あるいは補助を担っていることが意識化された。同時に、人生というスパンから自身の学習を捉えることにより、自身の周囲にある様々な事物を自身の日本語学習にとって有用な学習リソースとして意味づけるようになった。

4.2.2 学習カレンダー

- ・ポートフォリオ作成における記述の対象が、日本語学習のみならず、学習者に纏わる全ての出来事となったことにより、自身の日本語学習を支える様々な要素を認識するとともに、留意するようになった。例：動機づけと体調の関係性（内的・外的動機づけの重要性、動機づけ維持のための体調管理の重要性）、休息に対する意識化（ストレスへの感知、安堵とリラクソスの重要性）、心情（満足感、不満足感、励まし、欲求、希望）など。
- ・日本語学習のふり返りにおいて、目標の達成度、日本語力の変化・上達という総合的な自己評価に加え、日本語力低下・回復に対する意識化（回復に対する決意、日本語運用による自信の回復）といった形成的な自己評価を行うことにより、学習上の問題に対する具体的な対策を見出していた。

4.3 まとめ

以上の記述から次の「自己評価の可視化と蓄積」に関する変容の過程が明らかになった。

- ① 日本語学習と自身の人生のつながりを省察することの意味づけ
- ② 日本語学習と外国語学習及び専門科目の学習の関連に対する意識化
- ③ 学びは大学という教育機関のみに留まらないことへの気づき
- ④ 人生における現在の自身の位置づけ

学習者は、「自分自身」を芯とし、日本語学習をつなぐというイメージを持つことにより、日本語学習と日本語学習以外の外国語学習や各学習者がそれぞれに学ぶ／学ん

できた専門科目の学習が関連し合っていることということに意識が向くようになった。さらに、現在どのように関連し合っているのか、また、今後どのように関連し合っていくのか、ということを具体的に考えることによって、大学を超えた学習環境における学び、さらには自身の生涯における現在の位置づけを意識するようになっていった。

5 考察

以上の分析結果から、「時間的統合」と「空間的統合」の視点をポートフォリオに導入することにより、個々の学習者の動的な学びを人生・生涯を軸として可視化及び蓄積しうるという示唆が得られた。

日本語の教室は、その教室の対象として設定された学習者集団に対応した学習内容、学習ルール、学習ペースで、画一的、かつ同調圧力の強い学習環境となる場合が多い。そのような環境に属する学習者においては、本来各自が保有する動的な学びを意識化するとともに、唯一の人生・生涯を軸とする日本語学習をつくり上げていく必要がある。それゆえ、日本語学習／教育の中で、他の外国語学習や専門分野における経験、あるいは教育機関外における学び（学習者にとっては学びであると意識されていない場合もある）、学習者自身の人生について問われる機会を持つ意義は深い。それら全ての学びは、時間的及び空間的に分断されているわけではない。一人ひとりの生涯の中で「時間的統合」と「空間的統合」がなされ、相互的かつ複綜的⁶に連繋している。日本語学習はその一部となる。また、一人の内において、時期（印象に残る出来事との遭遇、他者との接触や交流、社会的制約と自身との相対化など）により、将来像は変化する。だからこそ、将来像の変化を可視化し蓄積することが肝要となる。

本ポートフォリオ作成活動の試みは、生涯学習／教育の視点に基づく日本語教育実践の一方法である。しかし、ポートフォリオという方法にこだわる必要はない。3.1で示した二点の「「生涯」という観点からの内省を促すポートフォリオの枠組み」は、ポートフォリオ以外の教育実践にも反映しうる。また、2.2で述べたように、「時間的統合」と「空間的統合」という二つの視点、それら二つの視点の統合という目的は、プログラムやカリキュラムの作成、教授内容の設定、学習環境の構築などを行う際に反映することが可能である。教育現場は、それぞれに、様々な制約を抱えている。しかし、どのような制約を持つ現場においても、生涯学習／教育の観点から日本語学習／教育を捉え直すことは可能である。また、それにより、生涯学習／教育の視点を取り入れた学習環境を、各現場に応じて、構築／改良することができる。ポートフォリオ活動は学習意識や学習行動だけではなく、学習者の生活や人生にも多彩な影響を及ぼし得るがゆえに、今後、さらに教育現場にどのような形で、どのような内容で取り入れていけばいいのか、議論していく必要がある。

6 グローバル化社会と日本語学習環境の構築

今後、日本国内・海外の大学において、私たち日本語教育実践者は、グローバル化社会を生きていく学習者自身が、自らの「生涯」という観点から言語学習経験や様々な学習経験を内省により連繋させることにより、上記の「時間的統合」と「空間的統合」

を行えるような学習環境の構築を目指していく必要がある。

一方、西山・平畑（2014）でも問われているように、日本のグローバル人材育成構想の本質を問い返すことも、日本語教育実践者に突き付けられている喫緊の課題である。舘岡（2015）が述べるように、「留学生と日本人学生がともに助け合って学び合える環境を創出すること—共生化」にグローバル化大学の指針が置かれることが肝要である。今後は、そのような共生化に生涯学習／教育の視点に基づく日本語教育がどのように寄与できるかに関しても、考察を深めていきたい。

注

1 本論文は、日本語教育学会大会 2015（平成 27）年度春季大会（武蔵野大学）において口頭発表（「生涯学習／教育の視点に基づく日本語学習ポートフォリオ作成活動」）したものに加筆修正を施したものである。

2 本研究は、実践時に筆者が所属していた早稲田大学に設置されている早稲田大学大学院日本語教育研究科・日本語教育研究センター「研究調査倫理ガイドライン」に沿い、事前に研究調査倫理審査に申請し、承認を受けた上で行なわれた。なお、共同研究者（黒田史彦氏及び竹内理恵氏）には事前に実践内容開示及びポートフォリオ使用の許可を得た。

3 本研究は、2013 年度早稲田大学特定課題研究助成費（特定課題 A 一般助成、課題番号 2013A-6464）の研究成果の一部である。

4 本研究は、JSPS 科研費 24520587 の助成を受けた研究成果の一部である。

5 ①及び②のいずれのポートフォリオも、日本語の形式の誤りに関しては、形式ではなく内容が重要であると判断し、教師による訂正は行なわなかった。また、フィードバックにおいては、基本的には、学習者自身で行った。実践者（発表者及び共同研究者）は、「いい、好ましくない」などの評価を付すようなフィードバックは行わなかった。

6 様々な要素が複雑に絡み合って形成される（つながりの）まとまりが一様ではないことという意味で使用する。

参考文献

Molinié, M. (dir.) (2011). *Démarches portfolio en didactique des langues et des cultures. Jeux de formation par la recherche-action*. CRTF. Amiens. France : Encrages-Belles-Lettres.

Molinié, M., Bishop, M.-F. (dir.), (2006). *Autobiographie et réflexivité*. CRTF. Amiens. France : Enrage-Les Belles Lettres.

Université de Cergy-Pontoise.(2008). *Maquette du PORTFOLIO DE 'ÉTUDIANT-VOYAGEUR EN FRANCOPHONIES*. Cergy-Pontoise : Université de Cergy-Pontoise.

大谷尚（2011）「SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10（3）, 155-160.

- 嘉数勝美 (2011) 『グローバル化と日本語教育政策:アイデンティティとユニバーサリティの相克から公共性への収斂』. 東京:ココ出版.
- 黒田史彦・山内薫 (2016) 「自らと日本語との関係の捉え直し—ポートフォリオ活動と—」. 『日本語教育方法研究会誌』(日本語教育方法研究会) 22 (3), 8-59.
- 館岡 洋子 (2015) 「留学生と日本人学生がともに学ぶ「日本語クラス」—グローバル化する大学の学習環境のデザインとして—」『早稲田日本語教育学』 19, 61-71.
- 独立行政法人国際交流基金編 (2010) 「1.4 ポートフォリオを理解する」『JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』 22-34. 2017年1月29日検索.
https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010ug_all_3e.pdf
- 独立行政法人国際交流基金編 (2009) 「開発編 IV-2 ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio: ELP)」『JF日本語教育スタンダード試行版』 68-93. 2017年1月29日検索.
https://jfstandard.jp/information/attachements/000003/trial_all.pdf
- 西山教行・平畑奈美 編 (2014) 『「グローバル人材」再考—言語と教育から日本の国際化を考える』. 東京:くろしお出版.
- 日本学術振興会 (2014) 「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」. 2017年1月29日検索.
<http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/>
- 文化庁 (2014) 「日本語学習ポートフォリオ」. 2017年1月29日検索.
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/kyouiku/nihongo_curriculum/index_4.html
- 持田栄一・森隆夫・諸岡和房編 (1979) 日本ユネスコ国内委員会訳「生涯教育とは」『生涯教育事典』. 東京:ぎょうせい.
- モリニエ、ミュリエル (Molinié, Muriel) (2008) 「ポートフォリオ最前線—学習と養成の立場から—」2008年度 第1回早稲田大学日本語教育学会 講演会資料.
- 文部科学省 (2014a) 「1-3.新たな時代を拓くグローバル人材育成のための大学改革の新展開 (新規)【施策目標4-1】」. 2017年1月29日検索.
http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/1312117.htm
- 文部科学省 (2014b) 「スーパーグローバル大学創成支援」. 2017年1月29日検索.
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm
- 山内薫 (2015) 「生涯学習/教育の視点に基づく日本語学習ポートフォリオ作成活動」『日本語教育学会 2015年度春季大会予稿集』 pp.159-164
- 山内薫 (2013) フランスの国立大学における日本語ポートフォリオ作成活動 — 日本語学習者の多様性を考慮した日本語学習を目指して『早稲田日本語教育実践研究』 1, 17-35.
- 山川智子 (2008) 「欧州評議会・言語政策部門の活動成果と今後の課題」『ヨーロッパ研究』 7, 95-114.
- 吉島茂・大橋理枝・編 (2004) 『外国語教育Ⅱ—外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』. 東京:朝日出版.
- 萬美保・村上史展編 (2009) 『グローバル化社会の日本語教育と日本文化—日本語教育

スタンダードと多文化共生リテラシー』. 東京：ひつじ書房.
立教大学日本語教育センター（2016）「大学の国際化と日本語教育—発展的で持続可能な学部・研究科との連携を目指して—」日本語教育センターシンポジウム2016資料.